紹　介

氣賀澤保規編著

『復刻　洛陽出土石刻時地記（郭玉堂　原著）——附　解説・所載墓誌碑刻目錄』

福　原　啓　郎

この書は、一九四一年（民國三十年）、洛陽の大華書報供應社から刊行された、郭玉堂の『洛陽出土石刻時地記』の復刻本である。そして、編著者の氣賀澤保規氏が整理した「『洛陽出土石刻時地記』所載墓誌碑刻目錄　附關連石刻書掲載所在目錄」と、同氏が著した「郭玉堂と『洛陽出土石刻時地記』——民國期における北朝隋唐墓誌蒐集の周邊」（平成四・五年度科學研究費補助金總合研究(A)研究成果報告書（研究代表者　安田二郎）『中國における歴史認識と歴史意識の展開についての總合的研究』一九九四年、所載の同名の論考に加筆補訂）を附す。

寫眞版で復刻された『洛陽出土石刻時地記』（以下、『時地記』と略稱）は、本文、およびその前後の司蘭沼（三十年來の同好の「總角友」）、王廣慶（『時地記』刊行當時、河南大學校長の任にあり、『時地記』の「校錄」を擔當）、郭玉堂自身の三つの序と王廣慶の附記のみならず、表紙、中表紙（中扉）、奥附、と別紙の「洛陽石刻出土地圖」（李銘西繪圖）をも含む。が、たんなる忠實な復刻ではなく、利用の便のために、本文中の四八〇點にのぼる、墓誌を中心とする各石刻の欄外上段には通し番號がアラビア數字で附され、原文には句讀點と固有名詞を示す傍線が施され、欄外下段には誤字の訂正などが加えられている。

著者の郭玉堂に關しては、その孫への直接のインタビューの内容をも含む、氣賀澤氏の「郭玉堂と『洛陽出土石刻時地記』」に詳しい。郭玉堂（一八八八～一九五七）は、洛陽在住の碑帖古物商である。盜掘の舞臺の眞っ只中となる邙山で生まれ育ち、盜掘が猖獗を極めていた一九一〇～三〇年代、城内の東大街で古物商を營んでいた。日中戰爭が始まると、店を疊んで邙山の生家（現在の孟津縣平樂鄉劉家坡村）に戻り、亡くなるまで、事實上隱棲していた。『時地記』に、子供の頃、生家に近い「塚」（墳墓）でよく遊んでいたことを回想する場面がある（通し番號192、北魏、于纂墓誌「清宣統二年冬、洛陽東北劉家坡村西溝内鄧姓地出土。距村半里。……。俗名豹塚。玉堂居此村、幼年時常登臨塚上也」など）。邙山がいわば自分の庭であり、かつ、自身も石刻に興味を懷いており、商賣のかたわら、石刻の拓本を採り、その所藏は十二萬八千枚に及んだ（趙萬里の『漢魏南北朝墓誌集釋』で用いられた拓本の大部分は郭玉堂舊藏）という郭玉堂は、ありていに言うならば、邙山一帶で發掘（多くの場合は盜掘）をおこなう地元の農民と、北平（北京）や上海などから買い附けにやって來る古物商や、金石に興味を懷く學者や名士との、出土文物を介した仲介役を果たしていたのである。

親交を結んでいた學者・名士として、上海博物館館長の徐森玉、故宮博物院古物館副院長の馬衡、コレクターの于右任と張鈁（二人はかつての陝西靖國軍の總司令と副總司令の閒柄であった）らの名が擧がる（「郭玉堂先生顯彰碑」）。中でも、特筆すべきは、郭玉堂が于右任の鴛鴦七誌齋と張

鈔の千唐誌齋の兩コレクションの蒐集に協力していた事實である。西晉の墓誌中、好一對とも言うべき、菅洛と成晃の兩「墓誌碑」（17と18）のうち、前者は鴛鴦七誌齋に（郭玉堂が六百元で「鄉人」から買い取り、千二百元で于右任に賣った。現在は、西安碑林博物館が所藏）、後者は千唐誌齋に入っている。

『時地記』の內容は、郭玉堂が實際に見聞することができた期間、それは、鐵道の敷設工事での唐三彩の出土をきっかけに、民國十年前後の洛陽鏟の發明により拍車が掛かった（馬子雲『碑帖鑑定淺說』）、大々的な發掘、それも科學的發掘ではなく、副葬品の陶器などの金目のものを搜す盜掘、もしくはそれに近い發掘に地元の農民も狂奔し、その結果、空前の大量の墓誌が出土した時期に重なる、すなわち、民國十四・十五年（一九二五・二六）をピークに、郭玉堂が商賣を始めた頃である淸の宣統元年（一九〇九）から民國二十七年（一九三八）に至る（「『洛陽出土石刻時地記』所載墓誌碑刻目錄」參照。最も新しいのが民國二十七年陰曆二月二十九日出土の287、東魏の趙珍の造像記。なお、後漢の熹平石經殘石（6）の本文中に「二十九年冬」の記載がある。淸代の光緒年間以前に出土した文物も、いくつかが著錄されている）期間における、古都洛陽一圓（現在の行政區畫でいえば、洛陽市の市區とその東・北・西に隣接する偃師縣・孟津縣・新安縣）で出土した石刻、とりわけ、洛陽北郊に位置し東西に延びる、「北邙山上列墳塋、萬古千秋對洛城」（唐、沈佺期「邙山」）と詠われた、後漢以來、歷代にわたって「墳墓の地」として名高い、邙山一帶において發掘された墓誌、の出土の經緯である。五百點近い石刻が、漢（後漢）・曹魏・西晉・北魏・東魏・北齊・北周・隋・附錄（石刻以外の文物など）と、基本的には王朝で分けられ、さらに、年代順、墓誌の場合は葬（改葬）年月日の順に並べられており、四八〇點中、王朝では北魏が二五二點で過半數を占め（次いで、隋の一七四點）、石刻分類では墓誌が四三〇點で九割を占めており、つまり、北魏の墓誌二三八點が主役をなしているといえよう。なお、唐以降の文物に關しては、司蘭沼の序に、上梓された「漢晉魏隋之部」と對をなす「唐宋元明之部」の手稿も存したと記されているが、現在に至るまで刊行は實現していない（氣賀澤氏の「郭玉堂と『洛陽出土石刻時地記』」によると、郭玉堂の孫が出版に向けて準備中の由）。

『時地記』の個々の文物に關する書式は、通し番號161の北魏の元纂墓誌を例にとると、

魏持節都督恆州都諸軍事安北將軍恆州刺史安平縣元纂墓誌　孝昌元年十月二十日

民國八年夏洛陽安駕溝村劉姓地內出土無塚

と（欄外で「恆州都→恆州」「十月→十一月」と修正が加えられている）、表題と「訪記」（改行、一字下げ）からなる。表題は、王朝、官爵、姓名、石刻の種類（「墓誌」など）、葬年月日、書人（葬年月日以下はポイントが若干小さい）、「訪記」は、出土年月日、出土地址、塚の有無、發掘狀況、副葬品、とりわけ「陶器」の精粗と賣却價格など。閒々、王廣慶の「校錄」（考證）が附く。そして、あくまでも郭玉堂自らの見聞に基づく、「訪記」中の石刻出土の情報、とりわけ「時地」（時期と地

址）の記録に、この書のタイトルにもなっていることからもわかるように、重點が置かれている。「時」は民國紀元と陰曆の月日で記されている。陰曆を用いるのは、おそらくは農民から聞いたからであろう（なお、「陰歴」と、何故か「歴」字を用いる）。たとえば、北魏の元嵩の墓誌（60）では「民國二十一年陰歴六月初七日上午八時、由洛陽城西、柿園村西半里出土。初發掘者爲王六成等十三人、先由五處鑿坑、未幾、石卽尋出。是日十二時、玉堂赴該村、二時到。陶器共十餘件尚未出完。墓深約三丈許。廣慶按、誌云……」と、出土した時間「上午八時」や郭玉堂の出發・到着時間までもが記されている。「地」、出土地も、村からの方角のみならず、距離や所有者まで記されている場合もある。たとえば、曹魏の鮑捐の神座（11）、「民國十二年陰歴四月、洛陽城東北二十里楊坟村北二百七十步處出土。地主爲馬太平。座高一尺、廣二寸三分、厚一寸。十四年春、玉堂與馬叔平遊洛陽城外、至東關夾馬營北、遇鄉人售揖（捐）・寄兩神座者。叔平以五十元得之、至北平。徐森玉慕之、以拈鬮法各存其一。廣慶按、廣川書跋云「神座鑿石爲位、以爲祭也」」（叔平は馬衡の字。民國十一年、私立南開中學の國文の教師であった老舍の月給も五十元）。以上のように、詳細な時間や地址までわかるものもあるかと思えば、その一方では、「出土時地待訪」と、「時地」ともに情報がないものまで、その精粗に開きがある。

以下、『時地記』の「訪記」に基づき、當時の狀況を再現してみたい。先程取り上げた、通し番號161の北魏の元纂墓誌、および同じ葬年月日（孝昌元年五二五、十月二十日）の162・163・164・165の元晫・元熙・元誘・薛伯徽（元誘の夫人）の五墓誌のうち、161・162・163の三誌は、「出土時地與與（ママ）元纂・元晫同。玉堂按、以上三誌、聞劉宗漢一月之間於自己地中、先後掘得喜甚。謂誌石售價、與地價埒也」（163、元熙墓誌）とあるように、民國八年（一九一九）の夏、一か月の間に相次いで邙山の、郭玉堂が生まれた劉家坡村の西に位置する安駕溝村の劉宗漢が、自分の所有地内で發掘した。郭玉堂が聞いた話では、劉宗漢はたいそう喜び、墓誌の賣却價格はその土地の價格とほぼ同じであったとの由。その後も、劉宗漢は安駕溝村を中心に發掘を精力的に進めており、民國十年には元厥の墓誌（219）、民國十二年には元誘とその妻薛伯徽の兩墓誌（164・165）、および馮氏の墓誌（47。馮氏は元誘の命婦）、民國十五年には元弼の墓誌（251）、民國十六年には元襲の墓誌（264）、および元譚とその妻司馬氏の兩墓誌（207・136）を發掘している。もっとも、劉宗漢にとっては、墓誌よりも副葬品の「瓦器」（陶器）の發掘が主目的であったであろうが（元誘と薛伯徽の夫婦合葬墓から出土した「極精」の「瓦器」は一千元で賣れている）。

村民の多くも發掘に加わっていた。そのことは、千唐誌齋所藏の成晃の墓誌（18）の「訪記」からもわかる。民國十四年（一九二五）陰曆十二月のこと、劉家坡村の南約一里の地で、東呂家廟村と左寨村の「村人」數十人がその墳墓を發掘したが、東呂家廟村のある人がこっそりと墓誌を埋めておき、他の人たちが立ち去ったあとで、ひそかに持ち歸り、翌日、他の人たちが憤慨したが、後の祭りであった、と。「後歸新安張伯英千唐誌齋」と續くが、その墓誌を買ったのは、郭玉堂本人であろう。「民國十五年陰歴二月十六日夜、洛陽小梁村北出土」（177、北魏、公孫猗墓誌）と「夜」に

出土したというのは、盗掘ということであろうか。「石歸地主、陶器歸發掘人」（72、北魏、元悅墓誌）は、墳墓の墓室から出土した文物の、地主と發掘人との間での分配の取り決めを示しており、興味深い。發掘ブームの末期、造像銘を發掘し、四百元で賣り拂った「數人」が縣政府によって逮捕される、ということもあった（287、東魏、趙珍造象）。ちなみに、民國二十五年、盗掘により出土し、現在、古墓博物館に復元された墓室に安置されている西晉の裴祗の墓誌に關して、『時地記』に記載がない。郭玉堂に情報がまったく入らなかったからであろう。

墳墓の墓室から出土した墓誌や明器は、地元の洛陽在住の、あるいは北平や上海からやって來た古物商が買い附ける。高價なので古物商が共同で買い取ることもあった。西晉の左棻の墓誌（24）は、洛陽の古物商から、郭玉堂らが閒に入って、張鈁が四百元で買い、その後、于右任の手に渡っている。郭玉堂自身も、出土文物の買い附に邙山に赴いているが、親交のあった馬衡らが同行することもあった。その折、郭玉堂自身、發掘された墓主の頭蓋骨を目にしたこともあった（250、北魏、元天穆墓誌）。出土文物の大部分は、北平や上海の古物商の手を經て、海外に流出した。墓誌とともに出土した石製の「陰宅」が、當初、六百元の値が附けられ、おそらくは北平か上海から來たであろう古物商（「某客」）が七千元で買い取り、二萬元で國外に轉賣されている（196、北魏、寧懋墓誌）。

この『時地記』が何故に復刻されたかというと、洛陽の邙山一帶から出土する墓誌に關する情報としては、清末民國初めの端方『匋齋臧石記』（宣統元年一九〇九）や羅振玉『芒洛冢墓遺文』（民國三年一九一四）などと、中華人民共和國成立後の考古關係の學術雜誌に掲載されている發掘報告書群の閒に位置し、かつ、その一端をすでに紹介したように、釋文中心の他の金石關係の著作とは異質の、出土の「時地」中心の、しかもユニークかつ興味深い內容であり、にもかかわらず、つとに知られる稀覯書であったからである。氣賀澤氏は「郭玉堂と『洛陽出土石刻時地記』」の中で、「ちなみに筆者のあたったところでは、たとえば上海圖書館にはカードはあっても所在が不明であり、中央の北京（國家）圖書館や北京大學圖書館には所藏されず、陝西省圖書館では閱覽不許可であった。日本でも調べえた主要機關のどこにも所藏されず、アメリカの Harvard Yenching Library にもなかった。いわば幻の一書といってよい。」と論じている。私自身、かつて拙稿「西晉の墓誌の本質」（『中國中世の文物』京都大學人文科學研究所、一九九三年）に取り組んでいた際、氣賀澤氏から御好意でそのコピーを頂き、それを利用して、西晉の墓誌の出土地の地圖を作成したりすることができ、多大な恩惠を享受したのであるが、その私に日本のみならず中國の研究者からもコピーのコピーの依頼があったことからも、その希覯さが推し量れよう。

では、何故にそれほどまでに小部數であったかというと、最大の理由は、洛陽という一地方都市において、一九四一年という、日中戰爭の最中、洛陽に日本軍が閒近に迫りつつあった時期に刊行されたからである。緊迫した狀況は、『時地記』の「訪記」からも窺うことができる。「〔王〕廣慶按、……。民國十八年、因案石入官、今存河南博物館。開封淪陷後、不知尙存否也」（146、北魏、劉根造像）「玉堂按、民國二十八年

陰歴六月十九日、余赴洛陽城北、避敵機空襲、……」（399、隋、元貴墓誌）などの描寫がある。そして、この出版狀況の劣惡さこそが、誤植の多さにも反映しているのであり、氣賀澤氏が訂正の上で復刻した所以であろう。

以上、『洛陽出土石刻時地記』とその著者郭玉堂について、紹介してきたが、その多くは氣賀澤氏の論考「郭玉堂と『洛陽出土石刻時地記』」に依據したのであり、屋下屋を重ねる愚を犯した點も多々あると思う。氣賀澤氏の論考をお讀みいただきたい。

二〇〇二年十二月　東京　發行所　明治大學文學部東洋史研究室（明治大學東洋史資料叢刊二）
發賣所　汲古書院
B五版　ii＋一二二頁＋地圖一葉
二五〇〇圓＋税

耿雲志等著
『西方民主在近代中國』

曾田三郎

一

近代中國の通史を、ただの事件史ではなく、何らかの基調をもったものとして記すことは、「革命史」がそれほど魅力的でなくなった現在においては、容易ではない。書名からうかがい知れるように、本書は近代中國における歐米民主主義の展開を基調とし、アヘン戰爭から國民黨による統治の終焉までを敍述している。著者たちは、歐米民主主義が近代中國において定着したとは、もちろん考えていない。失敗への科學的な總括は成功した經驗と同樣に貴重であると、著者の一人である耿雲志は述べているが、歴史は勝者のそれだけではないという意味において、また歴史の各局面には選擇の可能性が常に存在しているという意味において、重要な指摘であろう。

本書は六人の學者が分擔して執筆し、そのうちの一人である耿雲志が全體の調整と修正を行っている。耿雲志は中國社會科學院近代史研究所の著名な學者であり、清末の諮議局や胡適の研究で知られている。それ以外の執筆者は、同じく近代史研究所研究員で聞一多研究の聞黎明、梁漱溟研究の鄭大華らであり、いずれも中國近代思想史研究の專門家である。本書が近代中國における歐米民主主義の問題を扱うにあたって着目しているのは、民主主義の認識と實踐、言い方を變えると民主主義の思想と制度化であるが、どちらかといえば前者に關する記述が多いのは、六人の執筆者のこうした研究經歴が影響しているためなのかもしれない。

中國近代史研究において、歐米民主主義の思想と制度化を系統的に敍述した著作がこれまでにないことを指摘したうえで、耿雲志は關連する研究業績に三つの分野において言及している。一つは中國憲法史研究、もう一つは民主主義思想の受容・傳播とそれに影響を受けた民主主義運動史に關する研究、最後に、政治制度史の研究である。この三つの分野それぞれについて具體的な